109 學年度第一學期 Eurasia 基金會國際講座

「アジア共同体：東アジア学の構築と変容」（10）

議題：商店街の空間構成研究―台湾、日本、韓国を例に

第 10 回 Eurasia 基金会国際講座は、本校景観学系郭維倫教授を招き、その研究成果を発表してもらった。内容は主に商店街の空間構成に関する研究、日本の住所システム、アジアの都市に関する研究の三部に分けられる。

一、商店街の空間構成研究

郭教授は最初に商店街と夜市がアジアの都市の経済発展と存在にともなっていることを説明した。庶民には商店街と夜市といえば不衛生な環境、乱雑な空間、廉価な商品などのマイナスイメージがあるが、本研究は外部空間（道路）と内部空間（商店）の関係による新しい視点から注目し、生態心理学の視点を通して、空間形態と環境行動モデルを見つけ出し、建築本体（実体空間）、過渡空間（アーケード、固定組み立て、臨時組み立て、暫時使用）、外部空間（都市環境）について検討した。

郭教授が考える生態心理学の行為設定（Ecological Psychology of Behavior Setting）を構成する要件として、①定型活動②環境要素③定型活動および環境要素の一致④特定時間がある。空間利用分析（Analysis of Spatial Use）は以下の数種に区分される。①Street Vendor②Full opening with display③Full opening④Partial opening with display⑤Partial opening⑥Door with display⑦Door。その他に時間の変化にともなう人間の五感（Analysis of Five Human Senses with temporal physical changes）は、以下のものによって観察される。

視覚（Type of visual）：①Sign②Flag③Photo Picture④Handout⑤Sample（Original）⑥Sample（Imitation）⑦Voice from Staff

聴覚（Types of auditory）：⑧Voice from Record⑨Voice from Music⑩Voice from Shop

触覚（Types of tactile）：⑪Original⑫Imitation⑬Package

嗅覚（Types of olfactory）：⑭From Air⑮From Touch

味覚（Types of gustatory）：⑯Can Taste or eating in front of shop

それから郭教授は台日韓の商店街を分析した結果、日本の商店街は均質で、徐々に店を開き、異なる集団が異なる時間に現われると指摘した。韓国の商店街はある時間に集中し、あっという間に開店して、午後から夕方まで人の出が多い。台湾の商店街は開店するものもあれば閉まるものもあり、一つの空間が何度も繰り返し使われる特性がある。その他に日本と台湾は文化背景が異なるため、日本の

夜市は毎日きれいに片づけられ、日中にその痕跡はまったく見られないのに対し、台湾では乱雑なため、日中に夜市の跡が見られる。韓国は日本と台湾の中間である。

台日韓の商店街に関する研究から次のような結論が導かれた。夜市の店舗と時間の変化を通して、都市基準が構成する空間特性からはっきりわかるのは、時間の影響でくり返し循環的に行為設定が発生することである。また単一の夜市の店を分析する際には一つの行為設定を単位とし、都市全体の基準を分析する時には全体の商業圏を一個の巨大な行為設定とすると、都市の巨大商業舞台の行動が見られる。郭教授はアジアの都市を餃子にたとえ、たくさんの具が中に含まれているのに対し、欧米はハンバーグで、各層に分離しているという。

二、日本の住所システム

日本の住所は信号機上に、時計回りに表示されている。Barrie Shelton の説では、欧米の住所は道路型論理で、日本は畳空間論理に基づき、内から外へ広がっている。日本の住所システムは容易に構築でき、そのため誘導システムに優れ、細かい。

三、アジアの都市の相関研究

中国上海の都市空間は商店街のために設計され、タイは湿潤寒冷であるため、商店街は水上市場に設計されている。気候の影響は建築や景観設計を決定する。世界で唯一文化背景のない場所は飛行場で、英語文字しか使われない。

(Web サイト:https://Eurasia.pccu.edu.tw/faculty.php)
(原稿:陳毓敏・日文系副教授)
(日本語訳:塚本善也・日文系副教授)